

○カラオケBOX・外観
チェーン店の外観。

○同・室内

フォーマル姿の花筏桃(25)がチェロを弾いている。

【曲…バツハ・無伴奏チェロ組曲第一番プレリユード】
次にテールブルの上のスマホでオーケストラの映像を流し、それに合わせてチェロを弾く。

【曲…チャイコフスキー・交響曲4番第2楽章】を弾く。

次にも同じようにスマホで映像を流しチェロを弾く。

【曲…ベートーヴェンは・5番第2楽章】

スマホのアラームが鳴る。

時間は13時で、画面には「オーデイション」の文字。

桃、アラームを止めると大きく深呼吸。

桃「よし！」

と気合を入れチェロをケースにしまう。

○同・店舗入り口

チェロケースを背負いシオルダーバッグを斜め掛けした桃が店から出てくる。

(注…以降、桃は立っている時はチェロケースを背負っています)

○街道沿いの道

桃がブラームスの交響曲第2番第一楽章のフレーズを口ずさみながら歩いているとスマホが鳴る。

シオルダーからスマホを取り出すと画面には羽鳥悠馬の文字。

桃、電話に出る。

桃「もしもし、悠馬くん？」

○北國交響楽団事務局

事務局の前で羽鳥悠馬(25)がスマホで話している。

羽鳥「桃先輩？ 今どこですか？ 2時に間に合いますか？」

(以下、2分割)

桃、歩きながら話している。

桃「今そっちに向かっている所で、後10分くらいで到着する感じかな」

羽鳥「じゃあ着いたら時間まで一緒にオケスタの練習しましょう」

桃「ほんと？ 助かるー。今ね、ブラームスをやりたいなと思ってたところだったの」

羽鳥「ブラ1でも2でも付き合いますよ。オーデイションの肝はオケスタですから」

桃「ありがとう。私も何が何でも入団したいから根性入れて頑張る。じゃあまた後でね」

桃、電話を切る。(2分割終り)

桃「ほんと、頼りになる後輩だわ」

○信号交差点

最前列で信号待ちする桃。

信号が青に変わり歩き出すと、猛スピードで走ってきた自転車と接触してしまい、桃は跳ね飛ばされる。
チェロケースを背負ったまま道路に倒れている桃の頭から流血。
通行人達が駆け寄ってくる。

○会館の楽屋口

羽鳥が心配そうに立っている。

羽鳥「桃先輩、どうしちゃったんだよ」

同僚の声「羽鳥ー。そろそろオーディション始まるぞー」

羽鳥「はーい、今行きます」

羽鳥、渋々中に入って行く。

○北國総合病院・救急センター

桃がストレッチャーで運ばれる。

○同・手術室

桃が運ばれ扉が閉まる。

○同・外観(夕)

立派な病院。

(補足…これ以降、桃が立っている時は時はチェロケースを背負っています)

○同・タクシー乗り場(夕)

桃、目を開ける。

桃「ここは…?」

周りをキョロキョロする。

桃「病院? 何で? オーディションは? 今何時?」

桃がショルダーからスマホを取り出すと、電源が落ちている。

桃「何これ!? とにかく、とにかく行かなくちゃ!」

そこに一台の黄金色のタクシーが来て、運転席から男性運転手(40)が降り、桃に話しかける。

運転手「花筏桃さんでいらっしやいますね」

桃「はい、そうですけど」

運転手「お待たせしました。どうぞ」

運転手が後部ドアを開け、桃を招く。

桃「どうぞ? え、何? 悠馬君が手配してくれたの?」

桃はチェロケースを手に持ち乗り込む。

運転手「大きなお荷物とは珍しいですね」
運転手はドアを閉め、運転席へ。

○タクシーの中(夕)

桃はシートベルトをしながら話す。

桃「急いで市民会館までお願いします！」

運転手「大変申し訳ございませんが、このタクシーは行き先が決まっていますので、市民会館へは向かえません」

桃「行かない？ どういう事ですか？ 悠馬さんのタクシーじゃないの？ じゃあいいです。急いでいるので他のタクシーにします」

桃、シートベルトに手を掛けるが外れない。

桃「運転手さん、降りたいのでシートベルトを外して下さい」

運転手「弊社のシートベルトは一度締めたら目的地に到着するまで外れないんです」

桃「何それ？ 困ります、降ろして下さい！」

桃、シートベルトをガチャガチャしている、ふいに外れる。

桃「外れた」

桃、チェロケースを持って慌ててタクシーを降りると、外は夜。

○三途の川のフェリー乗り場(夜)

大きな川にフェリーが停泊。

フェリーの前に自動改札機のゲートがあり、何人もの人がチケットのQRコード³をかざして改札機を通りフェリーに乗り込んでいる。

ゲートには男性係員(30)がいる。桃を乗せたタクシー乗り場に到着。

桃が降りて来て、チェロを背負う。

桃「え、待って。暗いんですけど。：ゴールドへブンフェリー乗り場？」

運転手が桃の横に来る。

運転手「三途の川のフェリー乗り場です」

桃「三途の川？ え、どういう事？」

運転手「こちらが花筏様のチケットでございます」

チケットには大きなQRコード。

桃、受け取る

運転手「花筏様はこれからゴールドへブンフェリーで天国に向かって頂きます。そのチケットがあればこちらの自動改札機が通れますので。ではどうぞ行ってらっしゃいませ」

桃「ちょっと待って下さい。私は天国じゃなくて市民会館に行きたいんですけど」

運転手「残念ですがこちらは諦めて頂くしかございませんかと。花筏様はお亡くなりになるのですから」

運転手、一礼しタクシーへ戻る。

桃「お亡くなり：？」

桃、呆然と立ちすくむ。

その横を何人もの人が通り過ぎ、チケットをかざし改札を通り抜けて行く。
桃、係員を見つけ、話し掛ける。

桃「すいません」

係員「はい」

桃「タクシーの運転手さんにフェリーに乗るように言われたんですけど」

係員「チケットはお持ちですか？」

桃「…これです」

係員「はい。こちらのQRコードを改札機にかざして頂ければお通り頂けます」

桃「それって、私死んじやったって事ですか？」

係員「…そうですね」

桃「…じゃあオーディションは…」

係員「何も心配する事はございませんよ。お客様は何も考えずにフェリーにお乗り頂くだけでいいんです。あとはフェリーが三途の川を渡って天国へお連れ致します」

桃「…天国…」

桃、周りを見渡すと何人もの人が改札を通って行く。

桃も改札の前まで行くが、そこから進めない。

係員「お客様、どうされましたか」

桃「…私、乗りたくないんですけど」

係員「そう言われましたも、ここまでいらっしやっただのならお乗り頂くしかないと」
すると後ろの人から「通れないんですけど」と声を掛けられ、桃と係員は改札から少し離れる。

桃「もし、この船に乗らなかったらどうなるんですか？ 帰れますか？」

係員「申し訳ございませんが必ずお乗り頂く規則となっておりますので、そのような対応をさせて頂きませぬ」

係員、桃のチケットを取り改札機のQRコードにかざすと、桃の体が勝手に改札に向かう。

桃「え、ちよっと」

係員「この改札を通ってしまえば現世での記憶もなくなります。今は少し悲しいかもしれませんが、勇気を出してお進み下さい」

桃、抵抗しながら改札機に到着。

桃「やだ、待って下さい」

中に進むと出口が閉じてしまう。そして桃の体も自由になる。

桃「え？」

係員がチケットを見ると赤字で「手荷物持ち込み負荷」と書かれている。

係員「なるほど。お客様、その背中のお荷物は船内に持ち込めませんのでこちらでお預かりいたします」

係員、チケットを桃に見せる。

桃「え、チェロですか？ 困ります」

係員「規則ですので」

桃「じゃあやっぱり乗るの止めます。この子を置いて行くなんで出来ませんから」
係員「ではご自身で何とかして頂けますか」

桃「ナントカ？」

係員、チケットに書き込みをして、桃に返す。

係員「7日間の有効期間を付与させて頂きますので、その間に一度お戻りになり気持ちの整理をつけて下さい」

桃「帰れるって事ですか？」

係員「有効期間内にお戻り頂く前提での一時帰還です。なのでお体にも戻れません」
桃「もし戻らなかったらどうなるんですか？」

係員「強制的に引き戻させて頂きますのでご安心下さい。ただその場合、お荷物の安全の保障はしかねますのでご了承下さい」

桃「ええ」

桃、背中のチェロに手を回す

係員「ではお戻り下さい。運転手さん、お願いします」

運転手の声「かしこまりました」

立ち去った運転手が突然桃の横に現れる。

○北國総合病院・タクシー乗り場(夕)

金色のタクシーから桃が後部座席から降りてきてチェロケースを背負う。

桃「…さつきあつちは夜でしたよね」

運転手「最初に花筏様がご乗車された時と同じ時刻に到着しております。では次のご乗車、心からお待ちしております」

運転手、小さく一礼しタクシーに乗り込み、車を出す。

桃「7日間で何とかしろって言われても、そんな簡単な事じゃないんですけど」

桃、病院へ歩き出す。

○総合病院・外来ロビー(夕)

広いロビー。受付には事務員。

桃、チェロを降ろしソファアにダランと座る。

桃「これからどうしようかなあ」

そこに白衣姿でカチつとした雰囲気の笹森孝柎(27)が、点滴をした大樹(6)が乗る車椅子を押してやって来て桃に気付く。

笹森、大樹に「ちよつと待ってて」と言い、小走りで桃の元へ行く。

笹森「どうされましたか？ お気分でも悪いのですか？」

桃「え？」

笹森「顔色が悪いですね。失礼します」

笹森が桃の手首で脈を診ようとする。

桃、拒む。

桃「大丈夫です。考え事をしてただけなので」

笹森「そうですか、失礼しました。もし何かあればあそこの事務員に声を掛けて下さい」

笹森、小走りで車椅子まで戻る。

事務員は笹森を見て変な顔。

桃「とりあえず、私を探してみようかな」

桃、チェロを背負い事務員の元へ行く。

桃「すいません。お伺いしたい事があるんですけど」

事務員、無反応。

桃「すいません、」

事務員、無反応。

そこにナース①がやって来て事務員に書類を渡す。

ナース①「これ、お願いします」

事務員「ありがとうございます」

桃、ナース①に話し掛ける。

桃「あの、すいません」

ナース①、桃に無反応で立ち去る。

桃「何で？ 何でみんな無視するの」

○同・病棟の廊下（夕）

桃、トボトボ歩いていると、ドクターとすれ違いざまに会話が入る。

ドクター①「事故で少し前に救急に運ばれたクランケ、止まっていた心臓が急に再開したんだよ」

ドクター②「ほんとかよ。後でICU覗いてみようかな」

桃、うなづいて歩き出す。

○同・ICU前のロビー（夕）

桃の両親がソファーに座り泣いている。

弟の彬（25）は凹んだチェロケースに着いている血を拭いている。

母親「桃：桃：」

父親「桃の心臓は動き出したんだ。きっと大丈夫さ」

そこに桃がやって来る。

桃「お母さん、お父さん、彬！」

桃、両親に抱きつく。

桃「お父さんお母さん、ごめんなさい。心配かけちゃって本当にごめんなさい」

両親、無反応。

桃「お母さん？ お父さん？」

桃、彬の隣に座り頭をガシガシする。しかし彬も無反応。

桃「彬も！ いつも髪の毛触るとめっちゃ怒るじゃん。何で今日は怒らないのよ！」

そこにナース①がやって来る。

ナース①「桃さんの容体は落ち着いています。面会時間は終わっていますし、ご家族の方は一度お帰り下さい。何かありましたらご連絡させていただきますので」

彬、ナース①にチェロケースを渡す。

彬「これを姉の傍に置いてあげて頂けませんか？ チェロが近くに無いと不安がると思うから」

桃、凹んだチェロケースを見て驚く。

ナース①「お預かりします」

彬「ありがとうございます」

3人はロビーを去る。

ナース①がチェロケースを持ってICUの中に入って行く。

桃、3人に着いて行くか迷うが、ICUの扉を開けて中に入る。

○同・ICU・詰め所(夕)

扉付近の詰め所にいるナース②。

扉が勝手に開くのを見て、首を傾げる。

○同・桃のベッド(夕)

ベッドには頭に包帯を巻き横たわる桃の姿。

ナース①が桃のベッドサイドにチェロケースを置く。

桃「ありがとうございます」

ナース①は無反応で通り過ぎる。

桃、気を取り直して自分の姿を見る。

桃「こんな所に居たんだね。痛そうだけど大丈夫？」

桃、置かれたチェロケースを開け、中のチェロを見るとペグが折れ弦が切れている。

桃「あの時の事故でこうなっちゃったんだね。ごめんね…絶対直してあげるからね」

7

○同・ICU、

桃、扉を開けて外へ出て行く。

ナース②、勝手に空くドアを見て変な顔をする。

○病棟の廊下(夜)

桃が考え事をしながら歩いている。

桃「みんなに私が見えていないみたいだし、どうしたらいいんだろう」

何かを閃き立ち止まる。

桃「さっきのお医者さん。話し掛けてきたって事は私が見えてるんじゃない？」

○同・外来受付ロビー(夜)

無人のロビーに桃がやって来る。

桃「誰もいないなあ」

壁の時計を見ると7時48分。

桃「そっか、もうこんな時間なんだ」

桃、チェロケースを降ろしてソファアに座る。

桃「今日が終わっちゃうじゃん…」

大きなため息をつく。
桃「…家に帰ろうかな」

○バス停(夜)

数人の客と桃がバスを待っている。
バスが到着し後部ドアが開くと、客に
続き最後に桃が乗り、ドアが閉まる。

○バスの車内(夜)

桃、チェロケースを降ろし空いている席に座ると、ぼんやり窓の外を見る。

○住宅街(夜)

桃が歩いている。

○マンション・401号室(夜)

桃、シュルダーから鍵を出し開けようとするが、躊躇する。

桃「ドアが開いたのに誰も入って来なかった

らみんな怖がるよね。どうしよう。漫画み
たいにすり抜けたりしないかな」

恐る恐る手をドアに押し付けてみると、手がすり抜ける。

桃「うそ、すご!？」

○同・玄関(夜)

桃が玄関に立つ。

桃「こんな事本当に出来るんだね」

靴を脱ぎ下駄箱へ入れると、中へ。

桃「ただいまあ」

○同・ダイニング(夜)

食卓で両親と彬がコンビニ弁当を黙々と食べている。

桃、ドアをすり抜け恐る恐る来るが全員無反応。

桃「お母さん、お父さん、彬…」

○同・桃の部屋(夜)

四畳半のシンプルな部屋。大量のクラシック音楽関係の本や楽譜、CDやDVD
が並ぶ。その中に宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」の本もある。

桃が入って来てチェロケースを部屋の隅に置くとベッドに倒れ込む。
桃「私、本当に死んじゃうのかなあ。なんか実感湧かないだけだ」

桃、ウトウトし始める。
桃「明日起きたら普通に帰ってないかなあ」
桃、眠りにつく。

2日目

○同・桃の部屋(朝)

布団の上で背中を丸め眠る桃。
カーテンを開ける音で目を覚ますと、
母親が窓を開けている。

桃「おはよう」

母親は無反応で部屋を出て行く。

桃「そんな都合よくいかないか」

○同・ダイニング(朝)

桃がやって来る。

桃「おはよう」

3人が食卓で食事中。

桃「…病院に行ってくるね」

桃、出て行く。

○バスの中(朝)

桃が乗っている。

○同・ICU(朝)

ドアのボタンを押して桃が入って来る。

詰め所に居た看護師②、急いでドアの外を確認する。

○同・桃のベッド(朝)

看護師①が数値チェックしている。

やって来た桃が看護師①に挨拶。

桃「おはようございます」

看護師①は無反応。

桃、横たわる自分にも挨拶。

桃「おはよう。気分はどう？」

ベッドサイドのチェロケースにも挨拶。

桃「おはよう。君も調子はどう？」

そこに看護師②がやって来る。

看護師②「先輩先輩」

看護師①「どうしたの？」

看護師②「また勝手にドアが開いたんです。今回はすぐに確認したので、誰かのいたづらじゃありませんでした」

桃、ヤバっという顔をする。

看護師①「やっぱり故障かしらねえ。総務に連絡してみて」

看護師②「故障だったらいいんですけど…。原因不明だと気持ち悪いから」

看護師②、桃を見る。

看護師①「ちよつと。変な目で患者様を見てはだめよ」

看護師②「はい、すいません…」

看護師①②、歩いて去る。

桃「あなたが間違っってはいませんけどね」

○同・ICU詰め所(朝)

看護師①②がいる。

桃が来て二人に謝る。

桃「今後はご迷惑をお掛けない様に気を付けます。すいません」
そう言うと、扉を通り抜ける。

○同・外来診察室(朝)

桃、複数の科の診察室をチラ見して医師の顔を確認するが、笹森の姿は見当たらない。

桃「昨日の先生、名前を聞いておけば良かったなあ」

○同・外来受付ロビー

桃、チェロケースを降ろしソファーに座る。

桃「広過ぎるって、もお」

桃、ソファーの背もたれに体を預け上を見上げると、上は吹き抜け。

桃、何か閃き、チェロをセットする。

そして開放弦でドを弾いてみるが周りは無反応。

次にドレミファソラシドの音階を弾く。

桃「よし！」

桃、気合いを入れて演奏を始める。

【曲…バツハ・無伴奏チェロ組曲第一番プレリュード】

○同・廊下

手に紙資料を持った白衣姿の笹森が歩いていると、かすかに音楽が聞こえた気がして足を止める。

改めて集中して耳を澄ますと、わずかだがはつきりと聞こえ、笹森は聞こえる方に歩き出す。

○同・外来ロビー

やってきた笹森。ロビーで幸せそうに弾く桃の姿を見て小さく驚く。

笹森「あの人、昨日の？」

桃、笹森の姿を見つけ演奏を止め、左手を大きく振る。

桃「先生！」

笹森がキョトンとして「僕ですか？」と自分を指さす。

桃、大きくうなづき、急いでチェロを片づけ始める。

笹森が桃の元へ来る。

笹森「昨日の方ですよ。お加減はいかがですか？なぜここで演奏を？」

桃、答えようとして周りを見ると、数人の客が笹森を変な目で見ている。

桃、急いでチェロケースを背負う。

桃「とりあえず場所を変えませんか。私の姿は先生にしか見えていないので、ここで話すと言つて歩き出す。」

と云つて歩き出す。

笹森「独り言？」

笹森、ついで行く。

○同・廊下

誰も居ない廊下。

桃と笹森、壁を背に並んで立つ。

桃「まず私からお話をさせて頂いてもいいですか？」

笹森「お願いします」

桃「返事はしないで下さい。さつきも言いましたけど、私の姿は先生にしか見えていないので、人から見られたら先生は怪しい人になっちゃいます」

笹森、小さくうなづく。

桃「助けて欲しいんです」

笹森、驚いて桃を見る。

桃「実は私は」

笹森、人差し指を国の前で立てる。

笹森「（小声で）ついて来て下さい」

桃「え？」

笹森「落ち着いてお話出来る場所があります」

笹森、歩き出す。

桃、後続く。

○同・キッズルーム

遊具や本が沢山ある可愛らしい部屋。

そこに笹森と桃がやってくる。

笹森「どうぞお掛け下さい。とは言つても子供用の椅子で申し訳ありませんが」
桃「いえ、ありがとうございます」

桃、チェロケースを降ろし椅子に座ると本棚に「セロ弾きゴーシュ」の本を見つ
ける。

桃「ここにもあるんだ」

笹森「何がですか？」

桃「宮沢賢治のセロ弾きゴーシュ。このお話を子供の頃に読んだのがきっかけで私はチ
ェロを習い始めたんです」

笹森「そうですか」

笹森もチョココンと座る。

桃「あ、余計な話ですいません。改めまして私は花筏桃と言います」

笹森「僕は笹森孝終です。小児科医をしています」

桃「小児科の先生なんですか。それで……」

笹森「ここは入院中の子供向けのキッズルームです。今は利用時間外なので安心して下
さい」

桃「それでちっちゃいんですか。かわいい」

笹森「それで、先ほど花筏さんが仰ったお話ですが、どういう事ですか？ その、見え
ないとか、助けて欲しいとか」

桃「言葉通りの意味です。私は先生としかコミュニケーションが取れないので、とって
も困っていて、色々助けて頂きたいんです」

笹森「僕は生まれてから27年間、一度も霊感的な感覚を持ち合わせた事が無く、身内
にも靈感がある人はいません。そんな僕がなぜあなたとコミュニケーションが取れる
のか、理由が分からないのですが」

桃「それは、私にも分からないですけど……でも靈感は関係ないかもしれません。だつ
て私、まだ死んでいませんから」

笹森「死んでいない？」

桃「私の体はICUにあるんです」

笹森「ICU!？」

桃「意識不明でICUのベッドにいます」

笹森「つまり今あなたは体から抜け出してここにいらっしゃるんですか？」

桃「多分、そんな感じ？」

笹森「…仮にそうだとしたら、こんな所に居ないですぐにICUの体に戻って下さい。
そうすれば意識が戻るのではありませんか」

桃「私だってそうしたいけど、体には戻れないって言われてるんです」

笹森「言われてる？ 誰にですか？」

桃「三途の川の天国行きのフェリー乗り場の係の人です」

笹森「…三途の川？」

桃「その係の人に一度現世に戻って気持ちの整理をつけて7日以内にもう一度来るよ
うに言われたんですけど、その時に体には戻れないって言われてるんです」

笹森「…ちなみにですが、花筏さんが行かれた三途の川は僕が知っている三途の川と同
じでしょうか？」

桃「多分そうじゃないですか」

笹森「…であれば天国に行けるなら船に乗った方が良いのではありませんか。 地獄行

じゃないんですし」

桃「でもフェリーにこの子は乗せられないから置いて行かないといけないんです。そんな事急に言われても、心の準備が出来ないというか、嫌なんです」

笹森「この子？」

桃「チェロです」

桃、チェロケースを笹森に見せる。

笹森「…お気持ちは分からなくは無いです、花筏さんのお話を伺う限り僕では役不足だと思いますので、心療内科の先生をご紹介します。専門の先生にご相談されてみてはいかがですか」

桃「私の話…、信じて頂けないですか」

笹森「医者は細かく専門が分かれていますので、専門医に診てもらった方が早くきつと解決出来ると思いますので」

桃「じゃあ、これならどうですか？」

桃、壁をすり抜け廊下に出て窓から笹森を見て、またすり抜けて実内に戻る。

笹森、驚きの余り固まる。

桃「信じて頂けましたか？」

笹森、椅子からずり落ち

笹森「あ、あなたは一体」

桃、笹森の前にしゃがむ。

桃「私は先生に人生相談したい訳じゃないんです。壊れたチェロを修理に出して欲しいだけです」

笹森「…チェロの修理ですか？」

桃「事故の時に背負っていたから壊れてしまったんです。だから早く直してあげたくて。ICUの私のベッドにあるので一緒に来て頂けませんか？」

桃、チェロケースを背負い、笹森の腕を引っ張る。

笹森「待つて下さい。僕はこの後午後の診察があるから外出は出来ないんです」

桃「診察は何時からですか？」

笹森「15時からです」

壁の時計の時間は13時2分。

桃「じゃあ大丈夫です。この病院のICUですから」

笹森「え、うちの病院なんですか!？」

○同・ICU・詰め所

ナース①②がいる。

笹森が小窓から中に声を掛ける。

笹森「お疲れ様です」

ナース①「あら笹森先生、どうしたんですか？」

笹森「えーっと、知り合いの知り合いがここに運ばれたそうで…入っていいですか？」

ナース①「もちろんです、どうぞ」

笹森「失礼します」

笹森、中に入ってくる。

その後ろに桃が続く。

ナース②「どちらの患者様ですか？」

笹森「花筏桃さん？、です」

ナース②「でしたら奥なのでご案内します」

笹森、驚いた表情で桃を見る。

桃「前見て！怪しまれるから」

ナース②、桃の声に無反応。

○同・桃のベッド

笹森、横たわる桃を見て愕然とする。

笹森「この方は、いつ運ばれたんですか？」

ナース②「昨日です」

笹森「昨日」

ナース②「信号無視で猛スピードで走って来た自転車に跳ねられて心肺停止の状態
運ばれて来ました。その後心配再開されたんですが、まだ予断を許さない状態です」

笹森「心肺再開!？」

桃「これが修理に出したいチェロです」

ナース①、無反応。

笹森、魂の桃が指さす所を見ると、そこには凹んだチェロケース。

笹森「そんな…」

○同・キッズルーム

笹森と桃が入って来る。

桃「驚かしてしまってますいせん」

笹森「いえ…、こちらこそ疑ってしまってますいせんでした。まさか本当にこんな事が起こっているなんて」

桃「ですよ」

笹森「それで、修理はどうしたら」

桃「私のバイト先の楽器店の店長にお電話して頂けたら話は早いと思います」

笹森「分かりました。電話番号教えて下さい」

桃「はい。090…」

○同・ICUの前のロビー

笹森と桃がソファに座っている。

そこに店長がやってくる。

桃「店長！」

店長は桃には無反応で、笹森の元へ。

店長「笹森先生ですか？」

笹森「はい、急にお電話したのにお越し頂きありがとうございます」

店長「そんなの当たり前です！ 桃ちゃんは？ 桃ちゃんの容体はどうなんですか？」

会えるんですか？」

笹森「申し訳ありませんがICUはご家族以外は面会が出来ない決まりです。ですが花筏さんはとりあえず元気です」

店長「とりあえず元気？」

笹森「あ、いえ、違います。申し訳ございません。これがその楽器です」

笹森、店長にチェロケースを渡す。

店長「どうして桃ちゃんが事故になんて」

店長、ソファアの上にケースを置いて開ける。中には壊れたチェロ。

店長「これは？」

桃「直りますか？」

桃、店長に聞く。

笹森が店長に同じことを聞く。

笹森「直りますか？」

店長「ペグと弦は交換すれば何とか…。他は開けて見てみないと何とも」

桃・笹森「そうですか？」

桃「先生。店長に母親に電話するように伝えてもらえませんか。家族がお見舞いに来た時にチェロが無いと騒かもしれないから」

笹森「あ、ああそうだね。すいません、店長から花筏さんの御自宅に楽器を修理する事をお話して頂けませんか？ 僕も花筏さんから頼まれ…いえ、お友達から頼まれて店

長にお電話したので、ご家族は修理の事をご存じないんです」

店長「分かりました。店に戻ったら電話します。それなので、桃ちゃんは昨日オーディションはどうだったかご存じですか？」

笹森「オーディション？」

笹森が桃を見ると、桃は顔を横に振る。

桃「受けられませんでした。行く途中で事故に遭っちゃったから」

笹森「…受けられなかったみたいです」

店長「そうですか…。あんなに毎日努力してたのに…悔しいな」

桃「店長…」

笹森「あの、オーディションって何の？」

店長「オーケストラです。桃ちゃんはオケに入団する夢に向かって、音大を卒業してもバイトをしながら頑張り続けていたんです」

笹森「そうですか？」

店長「桃ちゃんが退院したら練習出来るようにしっかり直します。会えるようになったら僕もお見舞いに来ますので桃ちゃんよろしくお伝え下さい」

笹森「必ず伝えます。よろしく願います」

店長、チェロケースを持って去る。

笹森「店長…いい人ですね」

桃「はい」

○同・キッズルーム

笹森と桃が入って来る。

桃「ありがとうございました。お陰様で無事に修理に出せました」

笹森「いえ、あれくらいならお安い御用です。：あの、オーデイション、残念でしたね」
桃「今回のオケは何回もトラで入ってたし、音大の後輩に練習に付き合ってもらったりして対策もバッチリだったから悔しいです」

笹森「トラ？」

桃「エキストラの事です。人数が足りない時にヘルプで入る人の事」

笹森「ああ、なるほど。：でも花筏さんは心肺再開してるようですし、意識が戻る可能性があるんじゃないですか？もしそうならまたチャレンジすればいい」

桃「それはきつと、私がフェリーに乗らずに帰ってきたから一時的にだと思えます」
笹森「そうですか：とても不思議な話です」

桃「私も同じ気持ちです」

笹森「ではその背中のチェロも修理に出したチェロの魂みたいな存在という事ですか？だからロビーでの演奏も周りの人には聞こえなかったのかもしれない」

そこにパジャマ姿の漣（4）が泣きながら扉を開けて入って来る。

漣「こーしゅーせんせー」

笹森「漣。どうした？」

漣「大樹くんが泣いてるの」

笹森「そうか、ありがとう教えてくれて。すぐ行くよ」

笹森、漣を抱き上げる。

笹森「すいません花筏さん。子供の所に行きます。ここは15時に開放されますが好きなだけ居て大丈夫ですから。あの、どうぞお大事に」

桃「はい、ありがとうございます」

笹森、部屋を出て行く。

桃、一人残される。

○同・小児科・病室

4人部屋。その中の1台のベッドでナース③が大樹に点滴の針を入れようとをしているが大樹（6）が「あっちいけー」「やだ」と泣いて拒否。

子供①②も少し離れた所で泣いている。

そこに泣く漣を抱いた笹森がやってきて漣をベッドに降ろし大樹の元へ。

笹森「どうしました？」

ナース③「点滴の針を抜いてしまうので入れ直したいですけど、嫌がっちゃって」

笹森「どうした、大樹」

大樹「もう嫌なの。僕だけこれがあってみんなみたいに自由に動けないだもん」

笹森「そうか、ごめん。大樹はまだ点滴があった方がいいから先生が看護師さんに指示を出してるんだ。もう少ししたら要らなくなる日が来るから、それまで頑張ってくれないかな。そうだ、今日も先生のお仕事が終わったら車椅子で散歩に行かないか」

大樹「：うん」

笹森「よし、じゃあ3時のおやつも夕ご飯もちゃんと食べて待ってるんだぞ」

大樹「分かった」

笹森「ほら、みんなも泣かなくても大丈夫だよ。大樹は心配ないから」

笹森は、順番に子供を抱き上げ声を掛けている。

桃、廊下からその様子を覗いている。

× × ×

泣き疲れた子供たちがベッドで眠り、笹森とナース③が病室を出ると、そこに桃がいて笹森は驚く。

ナース③はそのまま立ち去る。

桃「聴こえないからお越さないと思うので、ちょっとだけ子供達に弾いてあげてもいいですか」

笹森「え、あの…」

桃、室内に入るとチェロをセットして弾き始める。

【曲…シューマン・作品15子供の情景第7曲・トロイメライ】

笹森、険しい顔で眠る大樹の傍に座り、桃の演奏を聞くが、演奏姿に惹きつけられる。

曲が終わり、もう1曲弾き始める。

【曲…ドラえもののうた】

演奏が終わり、笹森が大樹の顔を見ると優しい表情で眠っている。他の子供たちも安らかな寝顔。

桃「ご清聴、どうもありがとうございます。なんちゃって」

と言いつつ、チェロを片づける。

笹森「驚きました」

桃「え」

笹森「ドラえものの曲であんなに感動したのは初めてです。素晴らしかったです」

桃「それは良かったです。ありがとうございます」

笹森、笑みを浮かべながら眠る大樹の頬を優しくなでる。

○同・廊下

笹森と桃が歩いていて階段の前に来る。

桃「では私はここで。お世話になりました。ありがとうございます」

桃が立ち去ろうとすると、笹森が桃の手を取り階段を下りていく。

桃「え？ え？」

○同・階段の踊り場

笹森と桃がいる。

笹森「花筏さん」

桃「はい。あの笹森先生、こんな所で話して人に見られたら」

笹森「人が来たら黙ります。…花筏さんはこれから戻るまでの間、どう過ごすかお決ま

りなんでしょうか？」

桃「いえ…、残念ながらノープランです。気持ちの整理って言われても、どうしたらいいのかわからない」

笹森「であれば…もし可能なら花筏さんのお時間を僕に頂けませんか？」

桃「…はい？」

笹森「僕にチェロを教えて下さい。貴重なお時間を分けて頂くんです。一生懸命練習しますのでお願いします」

桃「それはちよつと…。私も自分の事で精一杯ですし」

笹森「あなたのチェロが子供達に幸せを届けてくれました」

桃「え？」

笹森「起きなかつたから実際には聞こえてないと思いますが、でも表情や寝息で分かります。僕は寝かしつける事は出来てもあんな幸せそうな寝顔にしてあげることは出来ません。僕もあなたのようにチェロが弾けるようになりたい。そして子供達に聞かせてあげたいんです」

笹森の迫力に桃は押される。

桃「…音を鳴らす位ならすぐ出来ると思いますけど…曲の演奏というのは中々ハードルが高いと思いますので、であれば教室に通われた方が良いでしょう。その方が自分のペースじっくり取り組めるし楽器もレンタル出来ますから」

笹森「楽器…」

笹森、桃を抱きしめる。

突然抱き付かれた桃、驚きながら笹森を跳ねのける。

桃「ちよつと、急になんですか!？」

笹森「大丈夫です。はつきり感じる事が出来ますので花筏さんのチェロを貸して頂けませんか? きつと僕にも弾けると思うんです」

桃「はあ! 貸しませんよ、貸す訳ないじゃないですか! やっぱり他の人から教わって下さい!」

笹森「気分を害されたなら申し訳ありません。ただ誰でも良い訳じゃないんです。あなたのチェロじゃなければダメなんです。あなたのチェロの力を信じたいです」

桃「そんな事…急に言われても困ります」

桃、速足で立ち去る。

笹森、追いかけてようとするが、ナースが歩いて来たため追うのを諦める。

○同・外来ロビー

桃、チェロケースを降ろし空いている席に座る。

桃「笹森先生ってクールに見えるのにあんな熱い人だとは、ギャップがすごいわー」

桃、笹森の言葉を思い出す。

(回想)

笹森「誰でも良い訳じゃないんです。あなたのチェロじゃなければダメなんです。あなたのチェロの力を信じたいんです」

(回想終り)

桃、チェロケースを抱きしめる。

桃「あんな風に言ってもらえたの初めてだったけど…すごい嬉しい」

○同・桃の部屋(夜)

桃、チェロケースを部屋の隅に置き椅子に座る。部屋の時計は20時05分。
桃「今日も終わっちゃうー」

桃、本棚の宮沢賢治の本が目に入り、手に取ってパラパラ見ると、『セロ弾きの
ゴージュ』のページ。

桃「いいなあセロは。落ちこぼれでもオケの楽団員なんだもん。：悠馬君、あんなに応援
してくれてたのに、きつとすつごい心配掛けたよね。謝らないとなあ」

3日目

○北國交響楽団事務局

桃がやって来る。

扉の前で楽団員2名とすれ違い、桃はつい会釈をするが相手は無反応。
前方から羽鳥が歩いてくる。

桃「悠馬君」

羽鳥、事務局の扉の斜め前の壁にもたれ、事務局を見ている。

桃、悠馬の横に立つ。

桃「オーデイション、行けなくてごめんね。私が全然来ないからきつと心配したよね」
事務局から数人の団員が出てくる。

羽鳥「国松さん！」

悠馬、国松（40）の元へ駆け寄る。

羽鳥「出ましたか？ オーデイションの結果。桃先輩はどうでしたか？」

国松、首を横に振る。

羽鳥「そんな…」

国松「オーデイションである以上受けていない人を選ぶ訳にはいかないだろう。僕らだ
つて残念なんだ。受けてさえいてくれれば」

国松、去る。

羽鳥「桃先輩…」

シヨックを受けた桃、その場を去る。

○会館・楽屋口

桃が出て来る。

桃「どういう事？ もしあの日オーデイションを受けてたら合格していたかもしれない
って事？」

桃の目から涙。

羽鳥、楽屋口から出て来て、階段に座り込む。

羽鳥「くっそお。許さねえぞ、桃先輩をはねた奴」

桃、羽鳥の前で泣きながら叫ぶ。

桃「悠馬君、私ここにいるよ！ チェロだつてあるから今からオーデイションしてもら
えないかオケの人に聞いてきて！ 合格者にもまだ連絡しないでつて伝えて！」

羽鳥、無反応。

羽鳥「桃先輩…、早く元気になって下さいね。僕、待ってますから」

桃「悠馬君……待っててくれても無駄なんだよ。…何で私がこんな目に合わなきや行けないの！ どうして私の大切な物を全部取り上げるのよ！ 家族もチェロも夢も、何でお別れしないといけないのよ！」

羽鳥、団員から呼ばれ、やさぐれながら戻って行く。
桃、涙をぬぐいトボトボ歩き出す。

○バスの中

バスに乗る桃、両手を見つめている。

○同・小児科病室

大樹、滯、子供①②がベッドで各々過ごしている。

桃が病室にやって来て、丸椅子に座りチェロをセットして弾き始める。

【曲…モーツァルト・キラキラ星変奏曲】

○同・病室前の廊下

笹森が歩いてるとチェロの音色が聞こえてきて、慌てて向かう。

○同・小児科病室

笹森が病室を覗くと、桃がチェロを弾いている。

光に包まれているように弾く桃の姿に、ふいに笹森の目から涙が流れる。

子供たちが笹森に気付き、「先生！」と声を出す。

桃、笹森に気付き演奏を止める。

笹森、桃と目が合うと慌てて涙を拭き病室を去る。

桃「え？ ちよ、ちよっと待って」

桃、慌ててチェロを片づけて背負うと、病室を出て行く。

○同・キッズルーム

桃が入ると、笹森がうつむいて椅子にチョコンと座っている。

桃「笹森先生？」

笹森はうつむいたまま。

笹森「今日も子供達の為に演奏して下さいありがとうございます」

桃、離れた所でチェロを降ろして椅子に座る。

桃「私、笹森先生にお話ししたい事があるんですけど」

笹森「このままの姿勢でもいいですか。真剣に聞きますので」

桃「…昨日のチェロのお話なんですけど」

笹森「それに関しては、花筏さんの都合も考えず不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした」

桃「別に不快とかじゃないんですけど、急に抱き付いてきたりしたからそっちに驚いちやって」

笹森「配慮が足りなくて申し訳ありません」

桃「…見てあげてもいいですよ」

笹森「え？」

桃「あんまり時間無いら少ししか見れないと思いますけど、それでもいいなら笹森先生に教えてあげてもいいです」

笹森、顔を上げるとグチャグチャ。

笹森「本当ですか！？」

桃「何ですか、その顔」

笹森「先ほどの花筏さんの演奏に感動してしまいました。お見苦しくて申し訳あえりません」

桃「これからは感動するだけじゃなくて吸収もして下さいね。私がこっちにいられるのはあと4日なので、その間に出来る限り私の全てを吸収して欲しいので」

笹森「もちろんです」

桃「じゃあ練習場所はどうしましょうか。カラオケBOXかレンタルスタジオを押さえますか。チェロも調達しないとだし」

笹森「それなら僕に任せて下さい。もうすぐ勤務が終わるので待ってて頂けますか」

○街道（夜）

笹森と桃が乗る軽自動車が走っている。

笹森「狭くてすいません、もうすぐ着きますので」

桃「いえ、大丈夫です」

○笹森邸（夜）

2階建ての豪邸。

駐車場に軽自動車一台入って来る。

○豪邸・リビング（夜）

笹森と桃が入って来る。

桃「車と家のバランス、おかしくないですか？」

笹森「家は親からの貰い物ですけど車は自分で買いました。通勤にしか使わないからあれで十分なんです」

桃「そうですか…。それで、どこで練習しますか？音出しはご近所の迷惑になるから気を配らないといけないんですよね」

○同・カラオケルーム（夜）

広々とした部屋に笹森と桃がいる。

笹森「ここなら時間関係なく大丈夫ですよね。地下だから防音も完璧です」
桃「そうですね…」

笹森、チェロを桃に見せる。

笹森「昨日の帰りに大島楽器店に寄って購入したんです。花筏さんはきつと教えて下さると信じていましたので」

桃「先生：お金持ちなんですね」

笹森「僕じゃなくて親ですよ。さあ花筏先生、時間がもったいなのでお願いします」
笹森、チェロをセットし始める。

桃「分かりました」

桃、ケースからチェロを出し笹森の横に座る。

桃「まずは開放弦から行きますね。弦を指で押さえずに弾くと、これがド、ソ、レ、ラです。弓はこう持つて力を入れて平行に引くと音がでますので、まずは私と同じように開放弦でドを弾いてみて下さい」

桃のお手本の後に笹森が真似をすると音が出る。

笹森「弾けました」

桃「そうですね。でもそれは弾いたのではなく鳴っただけです。弓はこれ位しならして大丈夫なので強く押しして下さい」

笹森「はい！」

笹森、真似して弾く。

桃「そう、そんな感じですよ。じゃあ同じように隣の弦でソを弾いてください」

× × ×

笹森、ドソレラが弾ける。

桃「だんだん綺麗に弾けてきてますよ」

笹森「花筏先生の説明が分かりやすいので」

桃「なんか花筏先生って落ち着かないので、名前で呼んで頂けませんか」

笹森「桃先生、ですか？」

桃「桃さんでいいですよ。笹森先生が本当の先生なのに私が先生っておかしいから」

笹森「そんな事ないですよ。僕達医者も先生には先生と言います。だから桃先生は桃先生です」

桃「でも私はプロでも無いから」

笹森「…では桃さん、続きをお願いします」

桃「次は音階です。チェロは4本の指を使います。人差し指が1番、中指が2番、薬指が3番、小指が4番です。そして1番でレ、2番でミ、3番がファで…」

笹森、桃の説明を真剣に聞き、繰り返し練習する。

笹森「押さえるのにも力が要りますね」

桃「音階が綺麗に弾けるようになったら、一気に弾ける曲が増えるので頑張ってください。今夜はこの練習に集中しますので、明日から曲を弾いてみましょうか」

笹森「はい、お願いします」

× × ×

練習を続ける笹森、ふと手を休め桃を見ると、桃は弓を置いて音をエアで弾いている。

笹森「…お気遣い頂いてありがとうございます」

笹森、気合いを入れて練習を再開。

○同・カラオケルーム

ブランケットを掛けられソファで眠る桃が目を覚ます。

桃、ブランケットに気付く、周りを見るが笹森の姿はない。

時計は8時05分。

○同・ダイニング(朝)

桃がやって来ると、立派なテーブルの上に複数のカップ麺と割りばしに、「出勤します。好きなだけお召し上がり下さい」と書かれたメモ。

桃「昨日遅くまで練習してたのに、笹森先生、指とか手とか大丈夫だったかしら。注射打つ時とかブルブル震えたりしなければいいんだけど」

カップ麺を見ると全て高級な商品。

桃、吹き出す。

桃「何よこれ」

桃、笑いながら立派な冷蔵庫を開けると、中は少しガラ空き。

桃、腰から碎け落ち爆笑。

桃「カップ麺にこれだったら、こんな立派な冷蔵庫要らないじゃん」

桃、窓際まで行く。

桃「そう言えばここってどの辺りなんだろう。昨日は夜だったからよく分からなかったのよね」

桃、大きな窓のカーテンを開けて外を見てみると、高級住宅地。

桃「…うそでしょ?」

○北國総合病院・小児科病室(朝)

笹森が濡に声を掛けながら注射を打っている。

○同・廊下(朝)

病室を出た笹森、両手をストレッチしながら歩く。

笹森「練習をやり過ぎると注射に影響が出るかもしれないな。気を付けないと」

そこに若い親子の会話が聞こえてくる。

母親「今夜はおぼちゃんのお家で待っててね。お母さん仕事で遅くなるから」

子供「やだー。僕も行く」

笹森、足が止まる。

笹森「そういえば、今朝自宅を出る時桃さんはまだお休み中だったから起こさずに出て来てしまったけど、考えてみたらいきなり家に連れて行ったのに一人残してきてしまった。これはかなり失礼じゃないか。どうしよう、どうしたらいいんだ」

○同・医局

笹森が手首をストレッチしながら入って来ると、先輩医師の石原(30)がいる。

石原「手、どうかしたの？」

笹森「少しだるい感じがするので、念の為のストレッチです」

石原「もしかしてゴルフ始めたとか？ じゃあ今度一緒に回ろうよ。可愛い女の子呼ぶよ」

笹森「生憎ゴルフではなくて。：そうだ、石原先生に教授頂きたい事があるんですが」

石原「何？」

笹森「女性へのお詫びの手土産はどんなものが良いんでしょうか」

石原「おやおや、デートで失敗しちゃったの？」

笹森「いえ、デートでは無いんですが、とある場所に置き去りにしてしまいました」

石原「置き去り？ まあ笹森先生の事だから悪気はなかったと思うけど、そうだなあ、

お詫びなら残らない物がいいかもね。スウィーツとか花とか」

笹森「スウィーツに花」

石原「もしお酒を飲む人ならアルコールもいいよ。梅酒やワインは女性は喜ぶよ」

笹森「なるほど」

石原「で、その手は？ ゴルフじゃないなら何なのよ」

笹森「チェロを始めたんです」

石原「チェロ？ すごくいいじゃん。いきなりどうしたの」

笹森「偶然聞いたチェロの音色が素晴らしくて僕も弾けるようになりたいと思いまし

て」

石原「いいじゃない。どこで練習してるの」

笹森「花筏桃さんという先生にレッスンして頂いてます」

石原「桃ちゃん先生か。かわいい名前じゃん。今度紹介してよ」

笹森、渋い顔で石原を見る。

○笹森邸（夜）

駐車場に止めた軽自動車から笹森が降りてくる。手には複数の紙袋。

部屋の明かりを見て、ホっとする。

○同・リビング（夜）

テーブルの上に、寿司、ケーキ、和菓子、加賀梅酒、ワインボトルが並ぶ。

桃「これ、どうしたんですか？」

笹森「今朝は桃さんを残して出勤してしまい申し訳ありませんでした」

桃「ああその事でしたら気にしないで下さい。高級カップ麺も美味しかったし、カラオ

ケルームで思いっきりチェロを弾かせて頂きましたから」

笹森「（ホッとして）そうですか」

桃、笹森の手の紙袋に気付く。

桃「それは？」

笹森「これは、あの」

桃、紙袋の中を見るとブルーと黄色の花のブーケ。

桃「すごい！ 綺麗！」

笹森「前にキラキラ星を弾いて下さったので、そのイメージで…」

桃「じゃあ私に？ 嬉しい！ 私、演奏でお花を頂くのにすごく憧れていたんです。ありがとうございます」

笹森「それは良かったです」

桃「ところで指や手は大丈夫でしたか？ 昨日ずっと弾いていたから痛くありません？」

笹森「少々疲れがありますが、仕事に影響があるほどでは」

桃「なら良かったです。短期集中とはいえ、無理をして痛みで弾けなくなったら元も子もないですからね。今日はまずお風呂でマッサージしてゆつくりして来て下さい。もう用意してありますから」

笹森「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて、そうさせて頂きます」

○同・バスルーム(夜)

笹森、湯舟につかり手をマッサージ。

その顔は何だか嬉しそう。

○同・カラオケルーム(夜)

桃がチェロを弾いている。

スウェット姿で頭が濡れたままの笹森が入って来る。

桃「髪の毛はちゃんと乾かして下さい。濡れたままは楽器に良くないですよ」

笹森「すいません。ドライヤーを持っていなくて…明日買ってきます」

桃「じゃあ今日の所は何としますか」

桃、棚からタオルを持ってくると、笹森の頭をガシガシふいてタオルを撒く。

笹森「ありがとうございます」

笹森、チェロをセットすると、音階を弾く。弾き終わると桃を見る。

桃「いいですね。じゃあ今日は曲をやってみましょう」

笹森「はい！」

桃、チェロをセットするとキラキラ星を弾く。

笹森「キラキラ星…」

桃「この曲は初心者でも弾きやすいし、子供達も知っていると思うので、披露したら喜んでもらえると思いますよ」

笹森「頑張ります」

桃「では早速始めましょうか。最初は、ドドソソララソ、です」

笹森、弾き始めるがぎこちない。

笹森「すいません、指が音階の位置を覚えきっていないからか思う様にいきません」

桃「大丈夫。繰り返し練習すれば弾けるようになりますから。さあもう一度」

笹森「はい」

時計は20時40分。

× × ×

桃が時計を見ると22時10分。

桃「少し休憩しましょうか」

笹森「はい」

笹森、弓を置くと手が辛そう。

桃、チェロを置き笹森の前に座ると、手のひらをマッサージする。

笹森「あの、自分で出来ますので」

桃「人にやってもらうと気持ち良くないですか？ 手もすごく軽くなるし、魔法も掛けられます」

笹森「魔法？」

桃、両手で笹森の手を包む。

桃「上手に弾けますように」

笹森、緊張して早口で話す。

笹森「魔法については分かりませんが、マッサージは血流を良くする事で疲労物質が蓄積されにくくなるのでその効果は認められています」

桃、笹森を見てクスクス笑う。

笹森「すいません。僕なんか言わなくても桃さんはご承知な事だと思っています」

桃「いえいえ、笹森先生が話すと説得力が違いますから」

笹森「そんな事ありません。僕はあなたの音色に魅了されチェロが弾きたいと思ったんです。あなたが僕のチェロなんです。だから僕には桃さんのお言葉は全て金言です」

桃「ありがとうございます」

笹森「…桃さんの音色は透き通るように優しくて、その音は浴びると全身の毛穴から浸潤して体中に広がり、セロトニンやオキシトシン、ドーパミンが分泌されたかのような幸せな気持ちに全身が包まれるんです」

桃、キョトンとする。

笹森「また説明っぽくなってしまいました。申し訳ありません」

桃「…多分すごく良い事を言っただけだと思いますけど、なんでだろう、ストーンとおりてこないです（笑）」

笹森「それは僕の未熟な語彙力のせいです」

桃「でも嬉しいです。ありがとうございます」

チェロの音色ってね、人の声に一番近いって言われているんです」

笹森「人の声？」

桃「もし私のチェロを聞いて幸せホルモンが出たのなら、それは私の心の声が毛穴からナントカして皆さんのハートに届いたと思います。チェロって心臓の上で指を動かすでしょ」

笹森「浸潤です。浸透に潤うと書きます。そうですね。確かに左胸で抱えますね」

桃、目に涙を浮かべながら

桃「私、最期に笹森先生と会えて本当に良かったです。笹森先生にチェロを認めてもらって、子供達にも届けられて報われました。何も残せないままこの子ともお別れしないといけないのかなと諦めかけてたので」

笹森「桃さん」

笹森、両手で桃を抱きしめそうになるが、その手を止める。

笹森「僕は桃さんからご教授頂いた事を忘れずに心を込めて弾き続けます。そしていつか桃さんを超えられるように努力し続けます」

桃「私を超えるおつもりですか？ 始めて2日なのに（笑）」

笹森「あ、これはただの大きな野望と言うか、まずはキラキラ星が弾ける事を目標に頑張ります。ちなみに：差支えなければ桃さんの夢もお聞かせ頂けませんか」

桃「私の夢はシンプルですよ。オーケストラに入団して、偶然公演を見に来たレコード会社の人の目に留まってCDデビューして、それから題名のない音楽会に出て、ソロでも活動を始め、コンサートでオケとドボコンで共演する事です」

笹森「…ドボコン？」

桃「ドボルザークのチェロ協奏曲です」

笹森「後で調べておきます」

桃「でも何一つ叶えられず私の人生は幕を下ろされちゃんです。天国に強制送還されて」

笹森「それに関しては…僕は無力で申し訳ないです。ケガや病気なら全身全霊でお力添えが出来るのですが」

桃「お気持ちだけで有難く頂戴させて頂きます。そろそろ練習再開しましょうか」

笹森「そうですね、3日後に病院で僕の発表会をする事になったので頑張らないと」

桃「…今、発表会って仰いました？」

笹森「はい。3日後の14時、場所はキッズルームです。先輩ドクターにチェロを始めた事を話したら聞かせろって煩くて、せつかなので桃さんがお戻りになる日に開催する事にしました。桃さんも聞きに来て下さいね」

桃「…嘘でしょ、3日後って…」

笹森「頑張ります！」

桃「頑張ります、じゃないですよ。人様に変な演奏聞かせれないし、絶対間に合わせるんです！ もう何で勝手にそんな事決めちゃうんですか」

5日目

○笹森邸・リビング（朝）

笹森が出勤するため入って来ると、桃が居る。

笹森「おはようございます」

桃「おはようございます。これどうぞ」

桃、笹森に紙を渡す。

笹森、受け取るとそこにはチェロのネックと弦が書かれている。

笹森「これは」

桃「これで空いた時間に指のポジションニングのイメトレをして下さい。ポジションニングさえ決まれば何とかなるかもしれないから」

笹森「ありがとうございます。それで、これを受け取って下さい」

笹森が封筒を渡す。

桃「なんですか？ ええ!？」

桃が中を見ると小切手帳と印鑑。

笹森「昨日僕には出来る事が無いと言いましたがひとつだけ思いつきました。フェリ

「の席をもう1席購入したらチェロも船内に持ち込めるんじゃないでしょうか。なので良かったらその小切手を使って下さい」

桃「…ものすごく高いかもしれないよ」

笹森「億で収まるなら大丈夫です。親から好きに使えと言われていますが欲しい物が特にないので」

桃「いやいや受け取れませんって！ 買えるかどうかとも分からないけど、買えるとしてもそんな大金頂けませんので、お返しします」

笹森「そうですか…」

桃「お気持ちだけで有難く受け取りますので…、行ってらっしゃい」

桃、笹森を見送ると、リビングを出てカラオケルームへ行く。

○同・カラオケルーム(朝)

桃、入って来る。

桃「笹森先生の親ってどんだけお金持ちなんだろう。大富豪って本当に存在するのね」

桃、笹森のチェロをふと見る。

桃「そりや楽器くらいポンって買えちゃうわよね。でも楽器はお金で買えるけどセンスは買えないからね」

桃、涙があふれてくる。

桃「私はどんなに人に聞いて欲しいと思ってもステージなんてほとんど無かったのに。

でも笹森先生は人前で弾けるようなレベルでは無いのにもう発表会って…、何で私の許可なく勝手に決めちゃうのよ！ 生気なのよ！ ステージで演奏出来る機会がどれだけ貴重なのか、恵まれすぎて有難味なんて分かってないでしょ」

桃、笹森のチェロを持ち上げ、床にたたきつけそうになるが、やめてそっと床に置き深く深呼吸。

そして目を閉じ頭の中に曲を流す。

笹森のチェロを使い頭の中の曲に合わせワンフレーズ弾く。

【曲…ドボルザーク・チェロ協奏曲】

桃、弾き終えて

桃「これじゃオケスタの練習と同じね」

笹森のチェロに

桃「ごめんね、八つ当たりしちゃったね。君には関係ないのに、本当にごめんね」

桃、笹森のチェロの手入れを始める。

○北國総合病院・医局

笹森が紙のチェロで練習をしていると石原が入って来る。

石原「熱心だねー」

笹森「もちろんです」

石原「ところでチェロの先生って女性？」

笹森「はい」

石原「年は？ かわいい系きれい系どっち？」

笹森「年齢は分かりませんが、多分同じくらいで、どちらかと言えばカッコいい系でしようか」

石原「いいねー、チェロって楽器を体中で抱きしめて演奏するのがいいよねー。先生も当日来るんでしょ、会えるの楽しみだなー」

笹森「生憎先生はいらっしゃらないかと」

石原「そうなの。じゃあ別に機会でもいいよ。そうだ。先生と同級生も誘ってみんなで食事会しようよ」

笹森「気が散るので静かにして下さい」

笹森、ふと自分の言葉を思い出し、急に心拍数が増えるのを感じる。

(回想)

笹森「あなたが僕のチェロなんです」

(回想終り)

笹森「なんだ、この気持ち」

○笹森邸・カラオケルーム(夜)

桃がチェロを弾いていると紙袋を持った笹森が帰ってくる。

桃「お帰りなさい」

笹森「ただいまです」

笹森、さり気なく照れる。

桃「病院で練習、出来ましたか？」

笹森「はい、空いた時間を有効活用させて頂けました。ありがとうございます」

桃「じゃあお風呂入って、それから練習しましょうか」

笹森「あ、ドライヤー買ってきました」

桃、笑顔。

笹森「ではまた後程」

笹森、焦って部屋を出る。

○同・脱衣所(夜)

笹森が洗面台で自分の顔を見る。

笹森「桃さんはあと3日しかないんだから、気合いを入れて練習しろ、いいな」

すると扉の向こうから桃の声。

桃の声「笹森先生、笹森先生」

笹森「は、はい。どうしましたか？」

桃の声「携帯がずっと鳴ってるんです。病院からみたいで」

○北國総合病院・ICU(夜)

笹森と桃が入って来る。

○同・大樹のベッド(夜)

大樹がベッドで苦しそう眠っている。

笹森「容体は!？」

ナース②「先ほどまで何度も嘔吐してバイタルも不安定だったんですが、石原先生が対処して下さり何とか」

笹森「良かった」

桃「大樹君」

笹森「しばらく僕が付いていますから」

ナース②「お願いします」

ナース②、立ち去る。

心配そうな桃に笹森が声を掛ける。

笹森「大丈夫ですか？」

桃「…ちよっとびっくりしました」

笹森「そうですね。でも大樹は大丈夫です。彼は強い子なので」

桃「そうですね。安心しました」

笹森「それにお隣のベッドにあなたがいる。きっと心強いと思います」

桃「え？」

桃、カーテンを開けて隣のベッドを見ると自分の姿・

桃「本当だ」

笹森、ベッドの桃の様子を見る。

笹森「こちらのあなたも落ち着いていますね」

桃「そうですね」

笹森、無言で大樹の元へ戻る。

桃「あの、私弾いてもいいですか？」

笹森「…桃さんがよければ」

桃「大樹君、良かったら聞いてて」

桃、背負っているチェロを降ろしセットすると演奏を始める。

【曲…モーツァルト・キラキラ星変奏曲】

すると大樹の顔が和らいでいく。

笹森、大樹の頬に手を添えながら、桃の演奏を聞いている。

隣のベッドで横たわる閉じられた桃の目からも、涙が一滴流れる。

6日目

○同・ICU前のロビー

ソファで桃が眠っている。

頭を撫でられている感覚で目を覚ますと、笹森が優しく撫でている。

桃「笹森、先生？」

笹森が、サッと手をどける。

笹森「おはようございます。ご気分はいかがですか？」

桃、起き上がる。

桃「大丈夫です。それよりこんな所で話すと」

笹森「大丈夫です。まだ早いから人手は少ないです」

桃「大樹君は？」

笹森「明日には病室に戻れると思います」

桃「良かったー」

笹森「演奏もありがとうございます。大樹にすっかり届いていました。僕もしっかりと拝聴させて頂き吸収させて頂きました。ありがとうございます」

桃「聞くのも勉強になりますからね」

笹森「僕はこのまま勤務に入りますけど、桃さんはどうされますか？もし僕の家に戻れるのならお送りします」

桃「いえ、少し自分とお話したいので、私もこのまま残ります。夜、先生のお家に集合しましょう。明日が本番ですものね。今夜は最後の追い込みをしないと」

笹森「分かりました。では気を付けて」

○同・ICU・桃のベッド

魂の桃がやって来る。

桃「どう調子は？」

桃、無反応。

桃「明日が猶予期間の最後の日だから、あなたは明日死んじゃうんだよ。…お母さん達もびっくりしちゃうよね。急に死なれちゃうから。結局オケにも入れなかったし、CDデビューも題名のない音楽会もダメで、ドボコンも弾けなかったね。これは私の実力不足だから仕方ないけど…でも私のチェロを喜んでくれる人達に出会えたんだよ。最後に少しでも大きな幸せを感じられちゃった。じゃあ明日、笹森先生の発表会が終わったらまた来るね。その時がほんとに最後のお別れだけど、あと2日、元気に過ごしてね」

桃、出て行く。

○同・タクシー乗り場

桃が乗り場前の道を歩いている。

桃「これからどうしようかな。そうだな実家に帰ろうかな」

すると金色のタクシーが目の前に現れ、運転手が降りてくる。

桃「あれ、運転手さん」

運転手「お待ちしております。どうぞ」

運転手、桃の手を引き後部座席に連れて行く。

桃「え、何、乗りません。私はタクシーに乗るためにここに来たんじゃないんで通るかかっただけです。放して下さい！」

しかし運転手に押し込められてしまい、タクシーが出発してしまう。

○三途の川・フェリー乗り場

桃がやって来て、係員に詰め寄る。

桃「何で今日なんですか、期限は明日ですよ。私をもう一度帰して下さい」

係員「花筏様がタクシー乗り場にお越しになったのではありませんか」

桃「通り掛かっただけです。明日の発表会が終わってから乗ろうと思っていたんです」
係員「そうでしたか。ですがもう送迎は出来ませんので今回はフェリーに乗って頂くし
かございません。チケットをお願いします」

桃「持っていますよ。乗るつもり無かったから家に置いてきました」
係員「…失礼します」

係員、桃のシオルダーの中を見ようとする。

桃「ちよつと、やめて下さい」

もみ合う内にシオルダーからチケットと封筒が落ち、係員がチケットを拾う。

桃、封筒を拾い、中を見ると小切手超と印鑑と笹森からのメモ。

メモには「席の購入が出来るなら必ずお使い下さい。もし買えなかったら来世で
お返し下さい。僕は来世でも桃さんと出逢いたいです。係員の人にその旨をよろ
しくお伝えください」

桃「笹森先生…」

係員「チケットはありましたので、お荷物を置いてお進み下さい」

桃「あの、座席！ もう1席買えませんか？」

係員「はい？」

桃「お金ならここにあります。これでもう1席売って下さい」

係員「生憎チケットは販売しておりません。例外はなく、お一人様1席の規則です」
桃「そんなぁ」

桃の体が何かに引つ張られるように勝手に動いて改札機に近づいて行く。

桃「やだ、行きたくない。私やっぱ天国に行けないの。この子ともっと一緒に居たい
し、子供達にチェロを弾いてあげたいの」

桃の体が改札機の前まで来ると、係員がチケットのQRコードを機械にかざし、
チェロケースの肩紐に手を掛ける。桃、叫ぶ。

桃「笹森先生の事も忘れたくないの！」

すると急に桃の体が半回転し、背中から改札に向い始め、チェロケースの肩紐が
勝手に切れてケースだけが改札機をくぐる。

肩紐が切れた衝撃で座り込む桃の目に、改札機の高こう側に転がるチェロケース
が見える。

桃「チェロ君！」

桃、チェロケースに向かって改札を通ろうとするが、出口側の扉が閉まる。

桃「チェロ君」

桃を係員が抱き上げ、改札機から離す。

桃「係員さん！ お願い、あの子をこっちに持ってきて下さい。私が船に乗るからあの
子をこっちに連れて来て下さい」

係員「あなたのチケットである荷物が通ってしまったので、あなたはフェリーにご乗船
頂く事は出来なくなりました」

桃「え？」

係員「チケット一枚でゲートを通れるのは1回。それが規則なんです」

桃「じゃああの子は天国に？」

係員、うなづく。

桃「…良かった。もし置いていってスクラップにされたらどうしようかと思ってたので」
係員「しかしあなたは天国へ行けなくなりました。後悔していませんか」

桃、頸を横に振る。

桃「私は幽霊になってもいいので現世に戻りたいです。霊感が無いって言ってたからストーカー扱いされたくないと思うし、先生がチェロを弾き続けてくれている間は静かに先生の音色を見守りたいと思います」

係員「それがあなたのご希望ですか？」

桃、意識が薄れていく中で静かにうなづく。

桃「だって…チェロ君はもう居ないし、私の姿は誰にも見えないんだから…」

係員の声「分かりました。…あと1日あって良かったですね。では良い旅を。運転手さん、お願いします」

桃、意識が無くなる。

○笹森邸・カラオケルーム（夜）

笹森が一人で練習中。

笹森「桃さん、こんな時間まで帰らないなんて大丈夫だろうか。いや今日は最後の夜だし、実家に帰ってゆっくりしているのかもしれない」

笹森、花瓶に飾られたブーケを見る。

笹森「僕は今練習に集中するんだ。そして明日、桃さんに感謝の気持ちを表すために立派に弾き上げて見せるんだ」

○北國総合病院・ICU・大樹のベッド

石原が大樹の様子を見ている。

大樹「石原先生」

石原「おう、どうした」

大樹「僕、こーしゅー先生の発表会見れる？」

石原「もちろん。大樹は今からみんなと一緒に病室にお引越しして、その後に先生と一緒に見に行こう」

大樹「やったー。…あれ」

大樹、カーテン越しに隣のベッドが気になる。

大樹「先生。隣の人、起きてない？」

石原「え？」

石原がカーテンを覗くと、桃が起き上がっている。

石原、慌てて桃に駆け寄る。

石原「大丈夫ですか？ 急に起き上がると危ないので、どうぞ横になってさい」

大樹、カーテンから見えた桃を見て

大樹「ドラえもんのお姉ちゃんだ」

石原「ドラえもん？」

石原、ベッドの名前を見る。

石原「花筏桃…。え、この名前って」

○同・医局

スーツ姿の笹森がいる。

笹森「桃さん、結局昨日は帰って来なかったけど、今日は来て下さるだろうか。まさかこのまま会えなくなるなんて事は…」

石原「笹森先生！」

笹森「石原先生」

石原「花筏桃さんが目を覚ましました」

笹森、驚いて立ち上がる。

○同・ICU・桃のベッド

桃の横に大樹が立っている。

大樹「僕、お姉さんの弾いてくれたドラえもん、もう一度聞きたいな。弾いてくれる？」
桃「ドラえもん？」

そこに笹森が駆け込んでくる。

笹森「桃さん！」

桃「…はい」

笹森「良かった、本当に良かった。帰って来れたんですね。体調は大丈夫ですか？」

大樹「こーしゅー先生。あのね、お姉ちゃんドラえもんを弾いてくれたんだよ」

笹森「ドラえもん？」

大樹「前に夢の中で弾いてくれたんだ。僕ドラえもん好きだから覚えてるんだ」

笹森「大樹…」

だが桃は覚えていない雰囲気。

笹森「覚えていないんですか」

桃「…はい」

笹森「…僕の事は…分かりますか」

桃「…すいません」

笹森「…それでも良いです。桃さんがお元気なら、それだけで充分です」

石原「笹森…そろそろ時間。花筏さんは俺がなんとかお連れするから」

笹森「お願いします」

○同・キッズルーム

子供達にナース、桃の家族に大島楽器の店長がいる。

そこに点滴をして車椅子に乗った桃が石原に連れられてくる。

スーツ姿にチェロを持った笹森が入って来ると、子供たちが「せんせー」と大喜びで騒ぎ出す。

笹森、一礼しチェロをセットして。キラキラ星を弾き始める。

その音色はまだまだぎこちなく音程も微妙にずれているが、笹森は心を込めて演奏する。

桃も笹森の姿をじっと見ている。

演奏を終えた笹森が一礼すると、みんなから大きな拍手と子供達からの歓声。
笹森、横に置いてあつた紙袋を持ち桃の元へ行く。

笹森「桃さん、今日の演奏、どうでしたか」

桃「素敵でした。上手く言えないけど……まっすぐに暖かい優しさが伝わってくるような感じ？」

笹森「ありがとうございます」

桃「私もチェロを弾いてみたくなりました」

笹森、うつむいて目を閉じる。そして顔を上げるとその目には涙。

そして紙袋から「セロ弾きのゴーシュ」の本と青と黄色の花のブーケを出して桃に渡す

桃「私に？」

笹森「はい」

子供達が騒ぎ出す。

笹森「これからも僕と一緒にずっとチェロを弾いて下さい。僕たちは『チェロ弾きの、桃とコーシュ』なんですよ」

○同・ICU・桃のベッド。

枕元の棚に置かれているシオルダーバッグの中に小切手帳と印鑑の入った紙袋。